PMT

三島市公式 Facebook ページ
FB 三島市 検索

フォト マイ タウン
PhotoMyTown

5月18日(月)

特別定額給付金の申請書を発送

≪生涯学習センター≫

住民1人あたり10万円を給付する「特別定額給付金」の申請書を発送しました。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、窓口での相談・受付を行いません。窓口に市民の皆さまが集まると感染リスクが高まりますので、ご理解くださいますようお願いします。

5月1日(金)

手作りマスクを寄贈

≪市長応接室≫

三島市老人クラブ連合会錦田地区の有志の方々が布マスクを思いを込めて一つずつ作成し、清潔に配布できるよう丁寧に個包して三島市に寄付をしてくださいました。

5月22日(金)

友好都市麗水市からマスク4.5万枚が到着

≪保健センター東館≫

麗水市では、友好都市提携を結んでいる47都市の内20都市へ支援物資を送っていますが、その中でも最も大きな支援を頂きました。「お互いに協力し合い、困難を乗り切りましょう。ウイルスと戦う友好都市にお力添えします」とメッセージが添えられました。

5月20日(水)

市から市内医療機関等へ衛生資機材の寄贈

≪市長応接室≫

市民の健康面を支える医療機関などの従事者の感染のリスクを減らせるよう、市からマスクなどの衛生資機材を寄贈しました。

市公式 Facebook ページでお届けしている記事から、話題のものを掲載しています。

歴史の小箱

No.385

地域の歴史 ―笹原新田―

郷土資料館（楽寿園内）☎971・8228

楽寿園内の郷土資料館では、「浮世絵でたどる東海道五十三次と四つ辻のまち三島」を開催中です。（6月28日(日)まで）

今回は箱根西麓に位置する笹原新田と、地域の歴史を伝える史跡をご紹介します。

箱根西麓の東海道沿いには、五ヶ新田と呼ばれる五つの集落があります。これらの集落は、徳川幕府が行った街道整備に伴い、元和年間（一六一五～一六二四）に三島や近隣の村からの移住によって作られたといわれています。笹原新田は五ヶ新田のうち三島から四つ目にあたる集落で、もう少し山を登ると山中城のある山中新田です。江戸時代は一町五〇間程（約二百メートル）の長さで街道沿いに家並みがあり、三石余の村高がありました。もとは小さい竹を意味する「篠」の字を使って篠原と書いたとされ、箱根山に多いとされる小竹が生い茂る場所であったことから名付けられたと考えられています。

東海道と密接に関わる五ヶ新田の集落では、街道交通に関する仕事がさかんでした。笹原新田でも、駕籠舁（かごかき）や旅人相手の茶屋経営などを行う住民がたくさんいました。集落内には江戸時代の旅で距離の目安となった一里塚が今も残されています。

このように東海道の交通とともに発展してきた笹原新田ですが、明治時代になると状況は一変します。明治二十二年（一八八九）に東京から神戸を結ぶ鉄道（東海道線）が開通すると、徒歩や馬で東海道を往来する旅人が激減し、住民たちはこれまでの旅人相手の仕事では食べて行けなくなってしまったのです。

▲笹原一里塚：現在は椎の木があるが、幕末の記録では松だった

そこで住民たちは、新たに畑を開墾して農業に従事するようになりました。開墾には様々な苦労が伴ったようですが、水はけがよくミネラルが豊富な土地や涼しい気候が野菜栽培に適しており、今では「箱根西麓三島野菜（はこねせいろくみしまやさい）」として有名です。なかでも大根は、平井源太郎が農兵節を使ったユニークなキャンペーンを行ったこともあり戦前から全国的に知られており、「たくあん」にして近隣の温泉旅館に販売したほか、戦時中には軍の保存食糧として、戦後は食料不足を補う副食として全国へ出荷されました。

笹原新田の一柳院（山中城の戦いで戦死した一柳直末を弔う）に建てられた笹原開墾碑には、社会情勢の変化によって方向転換を強いられた村人らの苦労と誇りが記録されています。

▲笹原開墾碑：明治38年に建てられた碑（一柳院境内）

三島の歴史を知る

旅行の気分だけでも味わいたい

浮世絵は江戸時代の旅番組？

江戸時代後半、歌川広重をはじめとする様々な作者によって街道を描いた浮世絵がいくつも出版されました。三島宿では必ずといってよいほど三嶋大社付近が描かれますが、他の宿場町でも富士山や大きな川、城や寺社などの名所旧跡がよく描かれています。まるで現代の旅番組と似ていませんか。

しかし、宿場の何気ない景観が主題となることもあります。例えば、広重の描いた御油宿を見てください。画面右手では旅館に着いた旅人がリラックスした様子で足を洗っています。一方、道の真ん中では宿場に着いたばかりの旅人二人が旅館の客引きの女性に引っ張られています。手前の旅人などは強引に首を引っ張られて苦しそうです。こんな地元の人との何気ないやり取りで旅の雰囲気を伝えるのも、町をぶらりと歩いて紹介する現代のテレビ番組に通じるものがありそうです。

▲「御油（ごゆ）　旅人留女（たびびととめおんな）」
（保永堂版『東海道五拾三次』絵巻より）

問 郷土資料館☎971・8228